

シネマ日記



No. 64

○月×日 「マーガレット・サッチャー 鉄の女の涙」(フライダ・ロイド監督)はイギリス唯一の女性首相として、80年代に12年もの長期間、保守党政権を率い、「アイアン・レディー」と称された強きリーダーの物語。08年に娘のキャロルは、サッチャーが8年前に認知症を発症していたことを著作で公表、86歳になる現在は夫が死亡していることも忘れるほど記憶力が減退していることを明かした。映画は、その著作が原作となり、彼女の意識の中では今もなお生きている夫との会話を通じて、過去を振り返る筋立てで進んでいく。雑貨商の娘に生まれ、父親が地元の市長を務めたこと

もあって、彼女自身も20代から下院に保守党から立候補するなど政治家を目指す。やがて保守党内閣の教育相になった後、党首選に出て、初の女性首相誕生となるのだが、その後のフォークランド紛争では戦争への道を選び、勝利に導いたことで、圧倒的な支持を得て長期政権を確立する。政治の舞台でも封建的な男社会にあつて、秩序や自助といった中産階級の毅然とした理念を重視しての孤軍奮闘ぶりが小気味よい。サッチャーが唱えた新自由主義による経済改革は「英国病」に喘ぐ経済を再生させたが、金融のカジノ化や富富の拡大など今日に至る問題を生んだのも事実だろう。映画は、一人の女性が男社会で出世階段を上っていく様子をよく描いているが、政治家サッチャーの功罪として、光の部分だけでない影の部分にも踏み込んでほしかった感はある。すなわち失業や貧困の問題に理念とは別にどんな感情を抱いたのか。政治家といえども、内面での人間の苦悩を、家族の前でなら吐露した

に違いないからだ。サッチャーを演じたメル・ストリップが3度目のアカデミー賞に輝いたが、認知症を患う老婦人ぶりは見事としか言いようがない。

○月×日 行きずりの女性と体を重ね、仕事以外の時間をすべてセックスに費やす男(マイケル・ファスベンダー)。ある日、そんな性的依存症の男のパートナーに、若い女が転がり込んでくる。恋人に捨てられた実の妹(キャリー・マリガン)だ。その日から、男の日常が狂い初め、不能になったりする。「シエイム」(スティーヴ・マックイーン監督)、つまり恥ずべき感覚といったものが呼び覚まされてしまったからだろう。バーの歌手をしている妹が歌う「ニューヨーク・ニューヨーク」に、兄は思わず涙をにじませる。肉親を断ち切ったはずのわけありの兄妹だったが、断ち切れないうれしみが漂う。砂漠のような都会の風景の片隅にも、恥や愛の心、人を思う気持ちが芽生えてくるのだ…。

○月×日 第一次大戦前夜のイギリスの農村で一頭

の馬が生まれた。やがて軍馬として戦場に駆り出される。「戦火の馬」(ステイブン・スピルバーグ監督)となる。大陸に渡り、戦場での兵士たちの数多の死、出会いと別れ。が、主人公の馬は、敵、味方の別なく生き抜く勇気と希望を託される奇跡的な存在になる…。ジョン・ウイリアムズの雄渾な音楽が胸に響く。

○月×日 女性におくてで38歳の独身の息子(ユアン・マクレガー)に、母を亡くした75歳の父(クリストファー・プラマー)はゲイであることを告白して青年との恋を打ち明ける。息子も父に触発され、二人で「人生はビギナーズ」(マイク・ミルズ監督)とばかり、まじめに恋人獲得にひた走るという話。プラマーは本作で82歳にして初のアカデミー賞(助演男優賞)を得た。「汽車はふたたび故郷へ」(オタル・イオセリアニ監督)は旧ソ連のグルジアでは、自由に映画作りができないと故郷を捨て、自由を求めてフランスに渡ったのだが、商業主義の壁に苦しむ…。(内藤 哲)